

もし認知症になつたら…

事例

1

プロフィール 佐藤清さん(仮名)70代 男性

- ・次男(独身)と二人暮らし
- ・市内に長男家族がいる

佐藤さんは独身の息子さんと二人暮らしです。奥さんは5年前に他界しました。佐藤さんは同居の息子さんがいつまでも独身だということを心配していましたが、奥さんが他界してからは、いろいろな面で頼りにしています。市内には長男家族が住んでおり、時々孫を連れて遊びにきてくれます。それが大きな楽しみです。温厚な性格で、近所の人ともにこやかに挨拶をします。近所の人は特別なお世話はしませんが、男性二人暮らしで不便なこともあるだろう、と何となく気にかけています。

ところがある時期から、佐藤さんは「家に知らない人がいる」と仕事中の長男に頻繁に電話をかけるようになりました。電話を受けた長男は驚きながらも「幽霊かもしれないから、お清めの塩でも置いたら?」と父親の言うことを否定せずに応対します。また、佐藤さんは曇りの日でも構わず、毎日布団を干すようになりました。不審に思った近所の人が尋ねると「布団の陰に誰かが隠れている」というのです。近所の人は心配して自治会長さんにそのことを伝えました。

さて、近所の人から連絡を受けた自治会長さんは、認知症かもしれないと思い、「おたっしゃ本舗」に連絡をしました。また同時に佐藤さんの息子さんからも「おたっしゃ本舗」に相談がありました。

病院で受診した結果、佐藤さんはレビー小体型認知症でした。この病気は見えないものが見える(幻視)というのが特徴です。早速、「おたっしゃ本舗」と「病院」、「佐藤さんの二人の息子さん」の3者が集まり、佐藤さんがなるべく日常生活を長く続けられるための話し合いがなされました。

その結果、佐藤さんは薬で病気の進行を遅らせながら、日常の生活を続けています。同居の息子さんは仕事があるので、日中は一人暮らし同然です。しかし班長さんが佐藤さんが軽い認知症だと知っているので、何となく気にかけてくれています。定期的に「おたっしゃ本舗」、「病院」、「二人の息子さん」が、佐藤さんの様子と対応を話し合い、介護認定のタイミングを計っています。早急に介護認定の申請をしないのは、まだ日常生活を送れる時点でデイサービスを利用すると、佐藤さんのリズムが崩れるからです。3者は佐藤さんの幸せな生活と息子さんの負担軽減の両方を考慮しながら、対応策を話し合っています。

「高齢期を地域で暮らす」ということは、認知症になっても、周りの人と支え合えながら、地域で生活する、ということです。では、実際に認知症になった人やその家族はどうやって支援の糸口を見つけ、日常の生活を続けているのでしょうか。事例を見ながら「その時」のために何が必要なのか探ってみます。※この事例は事実をもとにしたフィクションです。

事例1のポイント

- ・普段から近所の人と軽い付き合いがある⇒早期発見につながる
- ・息子さんが父親の言うことを否定しなかった⇒「否定されない」ということは「自分らしさを出せる」ということであり、「日常生活を続けられる」ということにつながる
- ・自治会長や息子さんがおたっしゃ本舗に連絡した⇒認知症に対する知識や相談窓口を知っており、適切な対応につながった
- ・自治会長や班長などの役員が佐藤さんに関わることによって、認知症の理解が深まった。⇒高齢者が住みやすいまちになる

事例 1 プロフィール 鈴木和夫さん(仮名)70代 男性

2

・妻、娘と3人暮らし

鈴木さんは奥さんと娘さんとの3人暮らしです。娘さんは3年前に離婚して再び同居しています。娘さんと一緒に住むことになって、奥さんは楽しそうですが、鈴木さんは複雑な気持ちです。もともと癌持ちでしたが、最近は年齢のせいか、感情のコントロールがうまくできず、家族に対して怒鳴り散らすことが増えました。奥さんも娘さんも鈴木さんの癌に辟易しています。

鈴木さんに異変が出たのは2年前です。最初は一人で出かけて、帰りが遅くなることがありました。しかし徐々に一人では帰ってこられなくなり、家族が交番に通報することが増えました。警察から地域の民生委員に捜索依頼があり、民生委員の知るところとなりました。

警察や民生委員は専門機関に相談することを奥さんに勧めましたが、なるべく家の恥を他人に知られたくないという思いと、民生委員が自宅を訪問した後は、鈴木さんが癌を起こし、家族が委縮するということが続いたので、奥さんは専門機関には相談しませんでした。その間に鈴木さんの症状は、ひどくなりました。

奥さんや娘さんが疲弊しきっていたことと、民生委員の説得もあり、やっと、「おたっしゃ本舗」に相談することになりました。

おたっしゃ本舗に連絡してからは、すぐに対応が始まりました。まずは、民生委員とおたっしゃ本舗が一緒に家を訪問しますが、両者が連携して、訪問の理由を鈴木さんに怪しまれないように打ち合わせをしたり、家の中では鈴木さんに気づかれないように、家族と話し、現状や、どんなことに困っているかなどを聞いたりしました。その結果、鈴木さんの認知症が進行しており、徘徊など命に係わる症状が出ていること。そして家族が認知症のことをあまり理解しておらず、現状を受け入れることや、対応の仕方がわからず、ストレス

を強く感じており、精神的、肉体的に非常に疲弊していることがわかりました。

その後鈴木さんには、病院で受診してもらい、アルツハイマー型認知症と診断されたので、適切な薬を処方してもらいました。そして介護保険の申請をすることになりました。また、安心して外出してもらうために、「佐賀市のあんしん見守り事前登録」に登録してもらいました。この制度は、佐賀市から配布された特別なシールを外出時に身に着けることによって、他の人が徘徊している鈴木さんを見つけたときに、警察や佐賀市の担当課にすぐにつながるシステムです。また、「佐賀県防災ネットあんあん」への登録もしてもらいました。これは鈴木さんが行方不明になった時に、事前にメールの受信を登録している人に「見かけたら警察にお知らせください」というお知らせが届くサービスです。そして、鈴木さんがよく徘徊するコースを検討し、近くのコンビニや交番、民生委員さん、自治会長さん、班長さんなどにも協力をお願いしました。

また家族も、家族だけで苦しむのではなく、ケアマネジャーと一緒に考えることになり、家族の負担が減りました。そして家族がケアマネジャー、病院と連携することで、鈴木さんの病状のことを知り、適切な対応ができるようになりました。

事例2のポイント

- ・「家の恥を他人に知られたくない」⇒適切な対処が遅れる
- ・おたっしゃ本舗に相談⇒いろいろな支援者とつながることができた⇒家族の負担が減った
- ・徘徊を無理に止めるのではなく、安心して外出できる環境を作る⇒いろいろなサービスを利用する、地域の人に協力してもらう

現在佐賀市では65歳以上の人の約7人に一人が認知症(軽度も含む)です。また2040年には4人に一人が認知症になると言われています。これから認知症になるのはあなたかもしれないし、身近な人かもしれない。そして道ですれ違っているかもしれません。誰でもが認知症になる可能性がある中で必要なことは、認知症に対する理解を深めることです。認知症を知ることで、自分や家族を守ることができ、高齢者の住みやすいまちづくりにつなげることができます。佐賀市では、認知症のことをよりよく分かってもらうために「認知症サポーター養成講座」をおこなっています。また公民館や他の機関でも認知症を学ぶための様々な講座が準備されています。これらを積極的に利用して、「その時」のために備えましょう。

高齢者に関するご相談は

おたっしゃ本舗城東(電話33-5294)まで
※認知症に対するご相談は担当者(八谷)まで

